

【報道関係各位】

株式会社ベネッセコーポレーション
代表取締役社長兼 COO 福島 保
(コード番号 9783 東証・大証第一部)

「大学生の学習・生活実態調査」の結果(速報)

いまどきの大学生 『先頭に立たず、努力には冷めた目』 授業の9割に出席しても、自主的な勉強をするのは少数

株式会社ベネッセコーポレーション(本社:岡山市)のシンクタンク「Benesse 教育研究開発センター」は、2008年10月上旬に、全国の大学1~4年生4,070名を対象に大学での学習や生活についての意識・実態調査「大学生の学習・生活実態調査」を行いました。

今回の調査では、現在の大学生について、主に以下の傾向がわかりました。

(1) 大学生の学習実態: 『授業には出席する。しかし予復習や自主学習をするのは少数派』

- ・1週間での通学日数の平均が4.4日、授業への出席率は87%と高め。特に理系学部で高い傾向。
- ・「授業の予復習や課題」を週に3時間以上する大学生は4人に1人。
- ・「授業以外の自主的な勉強」を週に3時間以上する大学生は5人に1人。

(2) 大学生の社会観や就労観: 『仕事観はまじめだが、社会そのものには厳しい現状認識』

- ・8割の大学生が「仕事を通じて社会に貢献することは、大切なことだ」と考えている。
- ・8割の大学生が現代の日本を「競争が激しい社会」と考えている。ただし、「努力がむくわれる社会」と考えているのは4割。

(3) 大学生生活で身についたこと: 『知識・技能は身についたが、外国語力やリーダーシップは苦手』

- ・「専門分野の基礎的な知識・技術」「幅広い教養・一般常識」といった知識・技能、および「進んで新しい知識・能力を身につけよう」とする態度については7割の大学生が身についたと自己評価。
- ・外国語を「読み・書く、聞き・話す」能力と、「自ら先頭に立って行動し、グループをまとめる」リーダーシップが身についたと自己評価する大学生は4割を下回る。

上記のような大学生の努力することへの肯定感の低さや対人関係におけるリーダーシップの低さは、次代を担う人材育成の面で課題と考えられます。今後、大学生を含めた青少年が、努力への肯定感や対人関係能力を高めるための取り組みを、大学をはじめとする教育機関、さらには社会全体で考えていく必要があります。

■ 調査概要

テーマ	大学生の学習・生活に関する意識・実態調査
時期	2008年10月上旬
調査方法	インターネット調査
調査対象	18~24歳の大学1~4年生4,070名。 ※ただし留学生、社会人経験者を除く。
調査項目	専攻する学部系統/高校での学習実態/大学進学を意識し始めた時期/大学選択で重視した点/大学受験対策として取り組んだこと/大学受験のときの入試方法/大学への志望度/大学の満足度/大学生生活で力を入れてきた活動/大学への通学日数/部活動・サークルへの参加状況/アルバイトの実施状況/1週間の過ごし方/授業への出席率/大学での学習状況/大学生生活を通じて身についたこと/社会観・就労観 など
調査企画・分析メンバー	山田礼子(同志社大学教授)、杉谷祐美子(青山学院大学准教授)、望月由起(横浜国立大学准教授)、山田剛史(島根大学専任講師)、樋口健(Benesse 教育研究開発センター研究員)、十河直幸(Benesse 教育研究開発センター研究員)

このリリースに関するお問い合わせ先

株式会社ベネッセコーポレーション 広報・IR部(坂本、西沢、中島、濱野)

TEL 042-356-0657 FAX 042-356-7301

以下、特徴的な調査結果をご紹介します。

なお、本データの詳細は、Benesse 教育研究開発センターの web(<http://benesse.jp/berd/>)にてご覧いただけます。

■ 特徴的な調査結果

① 授業への出席率はほぼ 9 割だが、学校外での学習時間は少ない

大学生の大学内での過ごし方をみると、1 週間での通学日数の平均が 4.4 日、授業への出席率は 87%であり、現代の大学生はまじめに大学に通っている様子が確認できる。しかし学年別で見ると、4 年生で通学日数・出席率が低くなる傾向、また学部系統別の「理工」「農水産」「保健その他」といった理系学部で、通学日数、授業への出席率が全体平均よりも高いことが確認された。

一方、大学外での過ごし方のうち、学習に関する項目について週に「3～5 時間」以上と回答した比率をみると、「授業の予復習や課題をやる時間」で 26.6%、「大学の授業以外の自主的な勉強」で 19.2%という結果であった。まじめに授業には出席しているものの、授業以外では学習時間を確保している大学生は少ないことが確認された。

表1 大学生の大学内・外での1週間の過ごし方など(全体・学年別・学部系統別)(ダイジェスト版 p.12)

		大学内 (平均)			大学外での時間の過ごし方 (週に「3～5時間」以上に回答した比率)			
		1週間での 通学日数	1週間を通して 大学で 過ごす時間	授業への 出席率	授業の予復習や 課題をやる時間	大学の 授業以外の 自主的な勉強	読書(マンガ、 雑誌を除く)	友だちづきあい
全体		4.4日	25時間06分	87%	26.6%	19.2%	27.2%	53.9%
学年別	1年	5.0日	29時間06分	91%	29.6%	15.2%	25.8%	50.2%
	2年	4.9日	28時間12分	88%	30.4%	16.4%	25.2%	53.1%
	3年	4.5日	24時間18分	87%	28.1%	20.4%	25.7%	54.4%
	4年	3.5日	19時間06分	82%	19.0%	25.0%	32.4%	57.7%
学部系統別	人文科学	4.3日	23時間36分	88%	30.7%	15.8%	33.4%	56.9%
	社会科学	4.2日	21時間36分	83%	17.7%	24.0%	28.1%	55.9%
	理工	4.8日	28時間18分	89%	35.1%	15.8%	23.4%	47.8%
	農水産	4.9日	33時間12分	91%	28.8%	15.2%	27.2%	52.0%
	保健 その他	5.0日	34時間00分	94%	35.4%	16.3%	21.2%	52.6%
	教育	4.5日	26時間30分	90%	21.0%	22.4%	25.2%	57.4%

注1) 学部系統の詳細はp.3を参照。なお、学部系統別の「その他」は省略した。

注2) 「授業への出席率」は「～割」としてたずねているが、便宜的にパーセント表記にしている。

注3) 「1週間を通して大学で過ごす時間」のうち、全体平均と比べ5時間下回るものを、上回るものをで示した。

注4) 「大学外での時間の過ごし方」のうち、全体と比べ5ポイント以上低いものを、高いものをで示した。

注5) 「1週間を通して大学で過ごす時間」の全体のサンプル数は4,057名、それ以外の全体のサンプル数は4,070名。

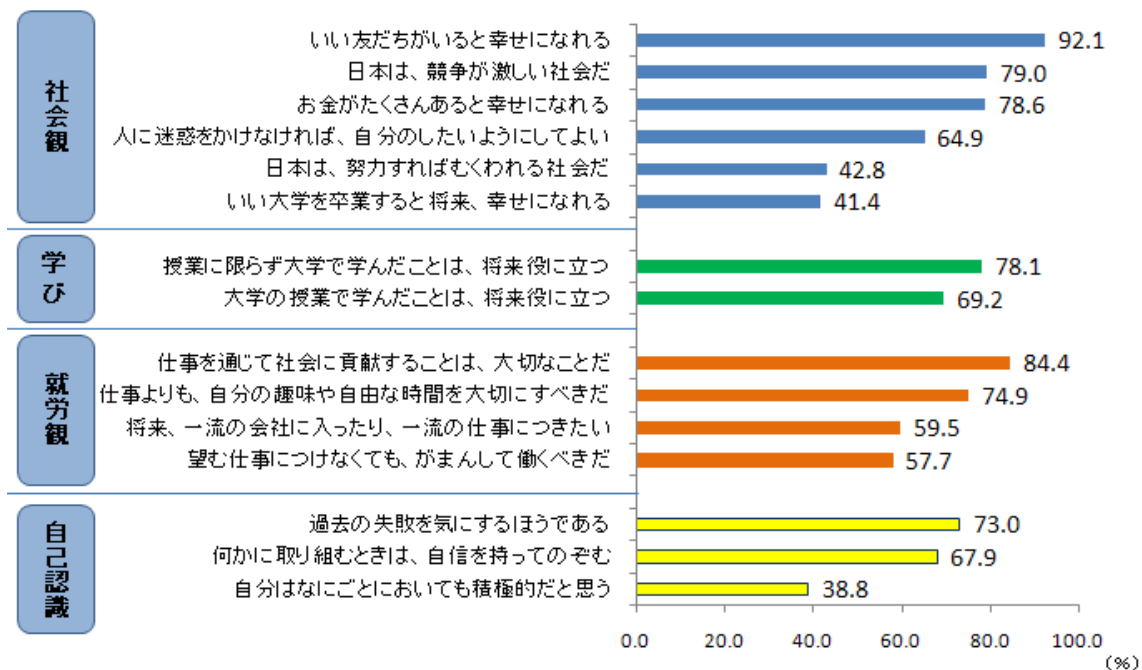
② 「競争が激しい社会」と考えるのは 8 割、「努力すればむくわれる社会」と考えるのは 4 割

大学生が社会や自分自身をどのように考えているのか、社会観・就労観などについてたずねた。最も高かった項目として「いい友だちがいると幸せになれる」が 92.1%であり、大学生は良好な友人関係を重視していることが示された。次に高かった項目は「仕事を通して社会に貢献することは大切なことだ」(84.4%)であり、仕事を通しての社会貢献への意識は高いとも言えるが、「仕事よりも、自分の趣味や自由な時間を大切にすべきだ」とする回答が 74.9%と、4 人のうち 3 人が考えていることから、仕事と私的な時間とのバランスを重視している様子がうかがえる。

現代の日本社会に対しては、「日本は、競争が激しい社会だ」とする回答が 79.0%、それに対し「日本は、努力がむくわれる社会だ」は 42.8%とほぼ半減する結果となった。これらのことは、多くの大学生が現代の日本社会を「競争が激しいうえに努力しても報われるとは限らない」という厳しい現状認識にあることを確認することができる。

さらに自分自身については、「何かに取り組むときは、自信を持ってのぞむ」が 67.9%と7割近い大学生が考えているものの、「過去の失敗を気にするほうである」とする回答が 73.0%でやや上回る結果となった。物事に自信を持ってのぞむものの、他方で過去の失敗を気にするという相反した認識を大学生の多くが持っていることは、「自分はなにごとにおいても積極的だと思う」での比率が相対的に低い(38.8%)こと、さらには「日本は、努力がむくわれる社会だ」の比率の低さとも関連していると考えられる。

図 1 大学生の社会観・就労観など(全体) (ダイジェスト版 p15 より一部データ並び順を改変)



注 1) 「とてもそう思う」+「まあそう思う」の%。

注 2) サンプル数は 4,070 名。

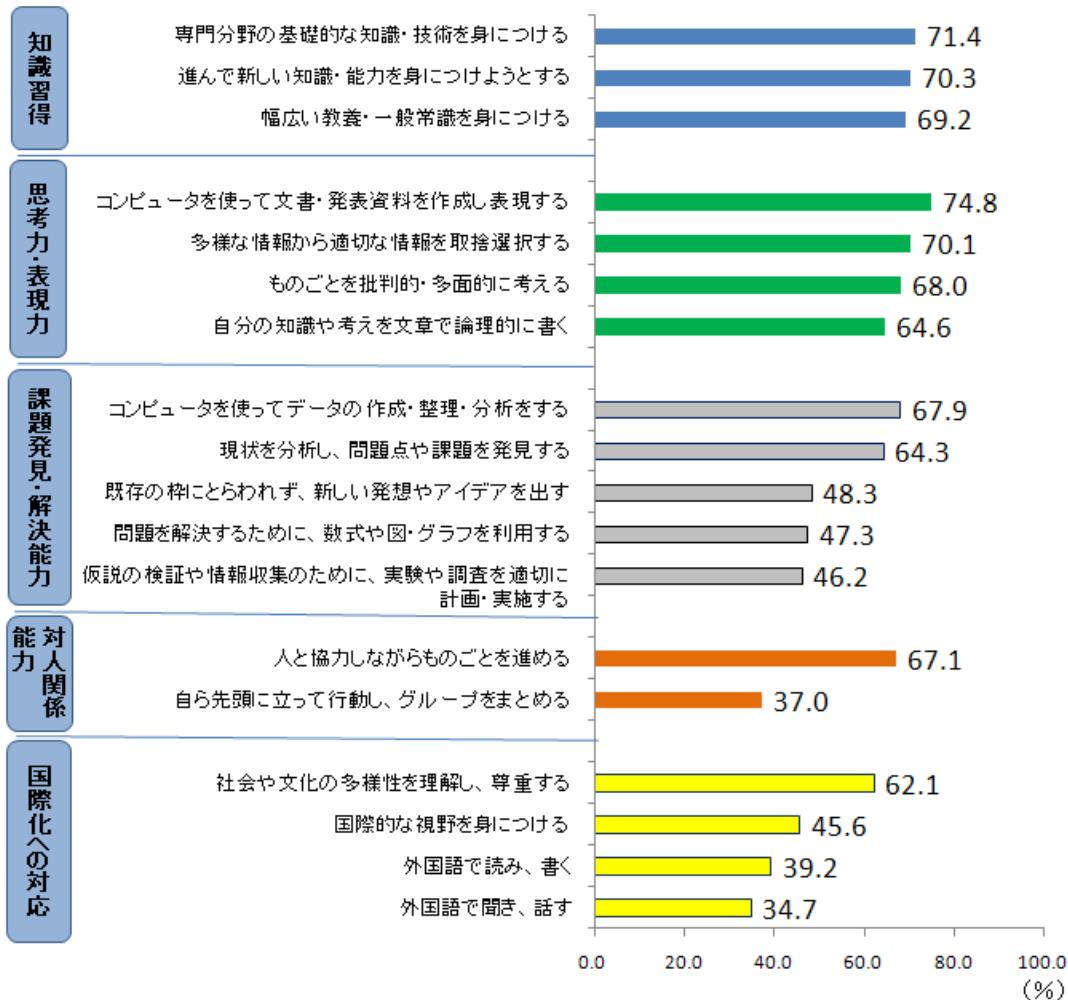
③ 「リーダーシップ」「外国語運用能力」に課題

大学生活で身につけたことを自己評価でたずねた。あくまでも自己評価であることに留意する必要があるが、「専門分野の基礎的な知識・技術」「幅広い教養・一般常識」といった知識・技能の習得、「進んで新しい知識・能力を身につけようとする」態度は 7 割の大学生が身についたと認識している。次いで思考力・表現力、課題発見・解決能力も概ね 6～7 割が身につけていると認識しているものの、「仮説の検証や情報収集のために、実験や調査を適切に計画・実施する」などの具体的な課題解決能力については 5 割を下回る結果となった。

一方、対人関係能力に関する項目では「人と協力しながらものごとを進める」は 67.1%と7割近いものの、「自ら先頭に立って行動し、グループをまとめる」は 37.0%と、40 ポイントの差がみられた。また外国語を「読み、書く」「聞き、話す」といった外国語運用能力では身についたとする大学生は4割を下回り、調査項目の中でも肯定率が低い項目群となった。

これらのことから、現代の大学生の集団の中で率先して行動するリーダーシップ、さらには外国語運用能力という面で課題を認識していると考えられる。

図 3 大学での学習成果(全体) (ダイジェスト版 p14 より一部改変)



注 1) 「かなり身についた」+「ある程度身についた」の%。

注 2) サンプル数は 4,070 名。

< Benesse 教育研究開発センターの活動 / Benesse 教育情報サイトでの情報提供について >

Benesse 教育研究開発センター (<http://benesse.jp/berd/>) では、今後も、時代の変化に即したテーマで調査や研究活動を行い、その結果を広く社会に開示することで、さまざまな方々との議論の輪を広げたいと考えています。また Benesse 教育情報サイト (<http://benesse.jp/>) では、ベネッセが保有する教育関連の各種データを公開しています。